はじめに

2019 年 12 月 20 日、一橋大学佐野書院においてシンポジウム「書物の記述・世界の記述——書誌が描く 18 世紀啓蒙の世界」が開催された。本報告書は、その記録である。

このシンポジウムを主催したのは、私が研究代表者を務める科研費基盤研究 B「啓蒙の言説圏と浮動する知の境界：貴重書・手稿・デジタル資料を総合した 18 世紀研究」（課題番号 19H01200）の研究グループである。

近年の啓蒙研究は、デジタル化された膨大な資料の発掘と読解に支えられている。私個人の経験を交えて述べるなら、1998 年にフランス国立図書館の主要部門がリシュリュー通りからトルビアックに移る前と後では、18 世紀に発行された文献との接し方が劇的に変わったように感じる。リシュリュー時代は、冊子体の目録で文献を探し、端末で請求記号を入力すると（この段階ですでに部分的な電子化は実現していたわけだが）、自分の座席まで本の現物を持って来てもらえた。本の状態が悪ければ、マイクロフィルムなどの別のアナログ媒体で閲覧した。トルビアックでは、目録検索が電子システムに切り替わっただけではない。2000 年代前半には複製を購入することができるようになるなど、文献そのものが少しずつ電子ファイル化されていった。現在、フランス国立図書館の Gallica という電子図書館では約六十万冊もの書物（雑誌や図版を含めれば桁が一つ増える）が無料で閲覧可能になっており、ダウンロードして所有することもできる。このようなサービスを提供している図書館は他にもあるし、インターネット上で検索すれば大抵の資料が見つかると言ってもよいほどである。居ながらにして貴重書を読める環境が出現したことは、人文学の研究のあり方を劇的に変えた。デジタル資料に依拠しない研究がありえないとは言わないが、この流れに背を向けたところで得るものは何もない。しかし、デジタル資料さえあれば研究を遂行できるかと言えば、決してそうではない。もとになった原資料に触れることで、ようやく見えてくるものがある。私たちはこのような認識に立って、各地の図書館が所蔵する西洋貴重書の現物を駆使して啓蒙研究を進めようと考えている。

そして、研究グループ発足一年目の締めくくりとして、このシンポジウムを企画した。力点を置いたのは、書誌学と思想史研究の両面から西洋貴重書それ自体が持つ価値に迫ることである。三つの研究発表はそれぞれに両方の学問に関わっているが、思想史から書誌学へと緩やかに重点が移行するように配列した。坂倉論文は、ルソーの『エミール』の複数の版本を調査し、18 世紀のフランスにおける出版業の実態に迫った。小関論文は、『百科全書』の書誌研究を例にとりながら、書誌学の知見を思想史研究に活かす可能性を探る。松波論文は、名古屋大学附属図書館における目録作成の実績をふまえて、思想史研究の成果を目録に反映させる具体策を提言する。三つの研究発表と質疑応答を通じて、研究者と図書館関係者が緊密な連携を図るべきだという認識が共有されるに至ったことは、シンポジウムの収穫と言えるだろう。

最後に、このシンポジウムに協力してくれた方々に、心から感謝を申し上げたい。

モデレーターとしてすべての研究発表と質疑応答の司会を担当した福島知己・帝京大学経済

学部講師は、一橋大学社会科学古典資料センター専門助手を務めていた経歴を活かして、書誌学と思想史の橋渡しをしてくれた。

シンポジウム開催に当たっては、一橋大学社会科学古典資料センターの協賛と日本18世紀学会の後援を得た。とくに、社会科学古典資料センターからは、研究発表で用いる資料の閲覧からシンポジウムの実務に至るまで、全面的な協力を得た。さらに、こうして研究成果を公開する場を提供していただき、誠に感謝に堪えない。

このささやかな報告書がきっかけとなって、書誌学と思想史の交流が活性化することを切に願う。

研究グループを代表して
小関　武史

本研究はJSPS科研費JP19H01200の助成を受けたものです。